
幻獣の館 ~屍の館~

玖琉 時斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻獣の館～屍の館～

【Zマーク】

Z3369F

【作者名】

玖琉 時斗

【あらすじ】

自分は後どのくらい生きていられるのだろうか。常に死と向き合っているこの場所で。

FILE 1・フュネリット

自分はどうのくらべて生きていらわれるのだろうか

常に死と向き合っているこの場所で。

レストランヴィアという大国の外れには、海沿いに一つの丘があった。否、丘といつよりもその高さと絶壁は崖と言った方が当て嵌まるだるべ。

辺りは暗く、ひっそりと全貌を覆い隠すように濃い霧が立ち込めている。

何処からか獣の遠吠えが響き渡り、木々が泣いているように空気を震わせた。

古き墓地も多いことから、この場に来る者は今や皆無。いつも秘密めいた不気味な空気を醸し出していた。

だが、理由はそれだけではなかつた。

「おい…、飯はまだか？」

溜め息交じりの声が、無駄に広い屋敷の一室に響いた。

「今少しお待ち下さいませ。ルウア様」

申し訳なさそうに年老いた声音が、返答する。ルウア様と呼ばれたのは、前者の青年だ。

椅子の背凭れに寄りかかって、少し縁がかつて見える黒い短髪を搔きあげる。

濃赤の瞳が少し疲れたような色を見せていた。

溜め息をついた時、一度ドアがノックされ、豪華な食事がトレイに乗って運ばれてきた。

それらは次々にテーブルの上へと並べられていく。綺麗に全てを並べ終えると、給仕の者達は一礼をしてから出て行った。

ルウアはスプーンを取り、スープを軽くかき回した。

静かに一掬いをし、口元に運ぶ。

だが、口にたどり着く前に眉をぴくりと動かしたかと思うと手を止め、そのまま口内に入れることなく、スープボウルへと戻した。半場投げやりに置いたので、カチヤリと音を奏でる。

その行動を執事は不思議そうに見つめた。

また椅子に寄りかかる体勢になり、呆れたような目で料理を眺める。

「まつたく…。こんなことをする時間があるのならば早く持つてくれば良いものを…」

「どうかなさいましたか？」

食事に手を伸ばさない主に、執事は動搖して尋ねた。

ルウアは据わった目で執事を見やつた。

「…毒が入っている」

「つーまだですか…!？」

静かな広言に対して、執事は呆れ驚いたような声を発した。ルウアは豪華な料理を目の前に、一際大きな溜息をついた。

「しかし、学習能力のない奴だ。我が一族には、そのような感知能

力が備わっていると知っているだらうに……」

自分を殺そうと毒が混入される事は、今に始まつたことではない。それは自分がこの屋敷の主人になつてから、ずっと続いていることだつた。

理由は、我がフェネリットの一族が人々に迫害されていることに関係すると思われる。

今いる此処は霧の濃い丘の最頂部に建てられた、洋館の建物である。朝になつても決して明るくないこの場所に、誰も近付こうとはしなかつた。

だがそれは建前でしかない。

本当に避けられる理由は、フェネリット一族という人でないモノとして括りに入れられている者が住んでいるからだ。

見た目は普通の人間と何ら変わりはない。

ただ初めは瞳の色だけで避けられたらしい。

黒髪に、この赤い瞳はより際立つて、恐怖の対象となるというのだ。そんな勝手な理由で嫌われているのにはむしゃくしゃしたが、他にも理由があつた。

それは、この感知能力である。

何故か何をされるにしても、何処にどんな危険があるか先に判るのだ。

幾度と無く殺されかけたが、この能力で生き延びた。

それが恐怖を煽つたのだろう。

いつしか一族は『不死の悪魔』と呼ばれるようになつていた。

その話を幼い頃から聞かされていたルウアは、屋敷から出ることも許されなかつた。

だから他の者は知らないのだ。

フェネリット家の本当に備わっている潜在能力を。

「ルウア様、しかし食べなければ死んでしまいます……」

「ああ、そうだな。だが毎度妙な処で優しい奴だ。これだと、人を本当に殺そうとしているのかと疑つてしまつ……。このパンには毒は入つていないうようだ」

ルウアは苦笑しながら言った。

パンを一口サイズに千切りながら口に運んでいき、同じく毒の入っていない水で流し込んだ。

このように毎日どれかには毒が入つていない。

まるで当たりを探す、ぐじ引きを引かされていくような感覚だ。

「毒は絶対に判るから、違う方法にしようと頭に伝えておけ。それと飲ますにしてもその辺で摘んだ毒草よりも、高いのを買えとな」

薄く微笑しながら言つたの言葉に、執事は無言で礼だけをとつて、部屋から出て行つた。

足音が遠退いていくのを聞き取ると、ルウアは椅子に座り直した。

「… わて、と」

そう言つと、先程乱暴に置いたスプーンを手に取り、スープを掬う。そして口へと運んだ。

毒の入つた少し冷めたそれを、躊躇いなく飲み下す。

何事もなかつたかのように、同じ動作を繰り返す。

だが、器の中の嵩を少し減らすだけに留め、スプーンを再びおいた。

「これ以上飲んだらバレる……かな？」

ルウアはくすりと笑つた。

パンと水を全て腹に入れ、椅子から立ち上ると、窓へと歩いた。

開け放つと心地良い風が流れ込んでくる。

霧で隠れているが、月の光がほんのりと覗いている。テーブルの方を一度見やると大仰に溜め息をついた。

「…だから高いのを買えと言つているのに」

ルウアがこう言つたにはちゃんと理由がある。
毒草などが全く効かない体質なのだ。

元からそういう耐性があるのか、それとも育てられたのかは解らない。

でも効かない。

試した事はないが、毒草は感知能力は働くが危険とは感じず、食してみたら平気だった。

ではちゃんとした配合された毒なら効くのではないか。
別に死を急いでいるわけではないが、生きている意味も別にない。
楽しみと言つても、この屋敷から出られない以上、食べることだけであった。

しかし何処からそんな金を手に入れていたのか、残された一族の財産だけで世界の美味しいものも、はたまた不味いものも全て食べつくしてしまつて、本当に楽しみなどない。

今はただ、誰が自分を殺そうと思つていてるのか、どのくらいやれば自分は死ぬのかを垣間見ることが楽しみとなつていてる。

この考へてゐる期間もまた一興だ。

自分の潜在能力と、一族に伝わる禁術は屋敷に勤めている者も知らない。

これらを知つたら、相手はどんな顔をするだろうか。
それもまた楽しみの一つである。

ルウアはその光景を思い浮かべ、くすくすと笑つた。
窓を閉め、ベッドへと身を投げ出す。

仰向けになり、額に腕を当て、もう片手は天井に突き出すように伸

ばした。

「明日は樂しこ」と起るのかな…」

ルウアは薄く笑うと、瞼を閉じた。

この手が明日は血に染まるようだ。

楽しみにしていることが起るやつだ。

そう願いながら、次第に意識は暗闇に溶け込んでいった。

FILE1・フェネリット（後書き）

初話なので、主人公の紹介をば。

名前：ルウア＝フェネリット

歳：19 / 種族：人間 / 性別：男 / 髮色：黒 / 瞳：
赤 / 身長：177

フェネリット家の末裔。黒い髪に、引き立つて見える真っ赤な目を持つ。

その異質な容姿と、特殊な力“危険察知能力”と“毒への耐久”の高さから迫害を受けた。

娯楽のない今は己の死際を試すことを楽しむ狂人。

全四話の作品です。グロイ表現もありますが、平気な方はお付き合い下さいませ！

FILE 2：人体実験

朝になつても外の景色は特に変わらない。

霧が濃過ぎるために薄暗い今まで、明るくなることは皆無だ。

それはただの気候ゆえなのか、何か呪いめいているのか。

そんな埒もない事を考えながらルウアは瞼を上げた。

いつもの用覚め時間を考えると、午前七時といつたところだらう。時計を見るとやはり針は七時を指していた。

ルウアは起き上ると一つ伸びをして、普段は着ない純白の生地で、金銀の絢爛で丁寧な刺繡が施されている、服の中でも一番高価なものを探び出し、袖を通した。

髪を梳かして、鏡に映る自分にルウアは人の悪い笑みを浮かべた。何か予感がする。

良い事が起こるような感覚。

良い事とは即ち、自分の願いが叶うことであり、命懸けの勝負を意味する。

やつと楽しみにしていた事がこの身に起こるのかもしれない。自分の生命の限界を知ることが出来る。

ルウアは高鳴る高揚感を抑えながらも、窓際に立ち、霧だらけの外を眺めた。

それと同時にノックが聞こえて、いつもの執事が入ってきた。

「おはようございます。……今日は…お早いですね」

「そうか?いつも通りだと思つが?」

ルウアはそう言いながら窓を開け放つた。

霧がいつもより晴れ、地面の色が良くなれた。

「何か嬉しいことでも御座いましたか？」

「いや、だが予感はある」

ルウアは窓を閉めると振り返り、執事に向かつてにやりと笑った。
全てを見通しているような、何かを企んでいるような、そんな目をして。

執事はその目を見て、ぞくりと身を振るわせた。
殺意は籠もっていないのに、恐ろしいと感じる。
一つ咳払いをしてその感情を誤魔化してやり過ぎす。

「ルウア様、お食事がもうすぐ運ばれます。どうぞ御席に・・・
・・・」

「ああ、すまないな」

椅子を引いてくれた執事に礼を良い、腰掛ける。
それと同時にノック音が響き、一人のメイドが中に入ってきた。
手馴れた手つきで素早く食事の準備をこなしていく。
その作業を終えるのに五分と掛からなかつた。
全てを並べ終え、メイド達は一礼をすると出て行つた。
ルウアは豪勢な朝食を眺め見て、薄く笑つた。

「今日のも美味そうだな。お前も食べるか?」

「いえ、滅相も御座いません。私は余り物で十分に御座います

「そうか。今日は折角の特別な馳走なのにな」

ルウアは意地の悪い笑みを浮かべた。

普段はこんなこと言ひはしない。

ただ一つ確認したい事があつたからだ。

それは一体誰が毒の混入をしていたのか、といふこと。

別に誰でも良いのだが、また一つ新たな遊びを思いついてしまったから。

馳走というのも、別段普段と変わつた料理が出てきていたわけではない。

ただ頭の奥で警鐘が五月蠅いほど鳴り響いていた。

危険。食べてはならない。逃げる。

その三つの指示が身体を巡っていた。

それは目の前に並ぶ料理に対しても、 “別のモノ” に対しての警告。指示した通り、今日の食事に入れられた毒は高級品のようだつた。果たして毒が即効性の強力なものになつたとして、自分は死ねるのだろうか。

ルウアは嘲笑うかのような笑みを浮かべた。

「どうかなさいましたか？」

なかなか食べない主人を訝んで、執事が問い合わせてきた。ルウアは否と答えてから、暫し逡巡した。

そしてすぐさま答えを弾き出し、淡い笑みを浮かべた。

自分の身体は一体どうなるのか。

毒を入れた首謀者がどのような反応をするのか。

これを楽しみと言わずに何と言つのだろう。

「 いただきます…」

人の悪い笑み絶やさずこそいつつと、わざと毒の一一番強い料理を手にして口に運んだ。

わあ、自分の命を懸けた人体実験を始めよつ・・・。

食物を口に含んだ途端、初めて身体に変化が生じた。
息が苦しい。

呼吸がし難い。

胸が焼けるように熱い。

警告音はこれ以上にないほど、けたたましく脳内に鳴り響く。

「ルウア様！？」

ルウアは座っていることもままならず、胸元を強く握り締めて床に倒れた。

執事が声を荒げて駆け寄つてくる。

その姿すら今は靈んで見えた。

これが死に近付くというものなのだろう。

さすがにちゃんと構成された薬物は強力なようだ。ふいに喉から鉄の味が逆流してきた。

つかえている感覚が気持ち悪くて咳き込む。

それと同時に大量の紅い霧が口から吐き出された。

「ルウア様！とりあえず水をつ！」

執事はそう言って、テーブルまで水をコップに注ぎに行く後姿が見えた。

己を護る大きな警告音が酷く耳障りだ。

だがルウアは毒ではこれだけ苦しめるのだと分析していた。

そんな冷静でいられるのは、自分は死はないという確証があるから。

もう実験はこれくらいにしておくか…。

微笑するとルウアは口内で小さく語り始めた。
それが音になる事はない。

ただ唇を動かし紡いでいく。

音に出さなくとも、それが解つていれば発動する。

フェネリット家に伝わる唯一の禁呪…。

唱え始めてすぐに警鐘は霧散し、苦しみの感覚が薄れていく。
最後まで唱え終えたところで、執事が水をもつて屈んだ。

「ルウア様！水です！私がわかりますか！？」

動かなくなつた主に、執事は焦つたように問いただす。
だが、それは声音だけで口元には笑みが浮かんでいた。

FIRE3：一族の終焉（前書き）

血などの表記あり。温いですが、グロがあります。

FILE 3：一族の終焉

執事は死んだと思って笑みを漏らしたのだろう。ぼやけていた視界が徐々に定められていく。

それを髪の隙間から盗み見たルウアは笑い始めた。初めは小さく、そして次第に大きく…。

渴いた空間にその笑いだけが響き渡つた。

「くつくつ…。あー…可笑しい…」

ルウアは笑いを抑えてゆっくりとした緩慢な動作で立ち上がる。目の前にしゃがみ込む執事は目を見開き、そんな馬鹿なという顔をして見上げてくる。

口端から流れ落ちる血を無造作に拭い、ルウアは執事を見下して、くつりと笑つた。

「お前は俺を殺したいのか？それとも生かしたいのか？」

「い、生かしたいに決まつては…」

「嘘だな」

その即答に執事の肩がびくくりと震えた。

あまりの事態に動搖を隠しきれていない。

ルウアは笑みを絶やさずに真っ直ぐと見据えた。

「俺が気付いていなかつたと思っているのか？あの茶番に…。ま、楽しかつたがな」

その場を動かぬ執事を無視して、ルゥアは窓際へ歩みを進めた。

霧がまた濃くなつてきているのが見える。

窓に立ち上がる執事の姿が反射して映った。

ルゥアは窓の枠に手を置いて、優雅に振り返った。

そこには先程まではなかつた殺意の込められた瞳があつた。

「何故、生きている……！？」

「何故……か。俺が毒が効かない体质なのは御存知力ナ？」

「効か……ない？」

悪戯に片目を眇めて言えば、執事は動搖で目を揺らした。

正しく言えば、効かないでなく効き難いんだが敢えて言わない。ルゥアはふと笑みを滲ませて、そうだと話を続けた。

「フュネリット家に備わっているのは危機感知能力だけではない。気付いていないだろうが、今までの毒料理にも手をつけている。そして……飲む度にその毒耐性は強くなる」

真実を聞いた執事は今までにないほどの驚きを見せた。

それはそうだろう。彼は長く努めていたとはいえ、それを知るのは一族の者だけなのだから。

だが、しかしといって執事は食つて掛かつた。

「さつきは倒れたではないか！今までだつて苦しそう……！」

「ああ、苦しかつたな。別に演技ではない。急に強い毒になつたから耐性がなかつた」

それは嘘ではない。死ぬほど 苦しみを味わった事は事実。

あのままでいれば、自分は間違いない「屍」と化していただろう。

“あのままでいれば”。

この一言が非常に重要であるのに、動搖した執事は気付いていなかつた。

「…何故、私が毒を入れたと？」

「お前は初めからこの土地と屋敷を狙つてきたのだろう? これほど長く勤める者はいない。誰も近付かない此処も、主がいなくなり、売り飛ばせばかりの額になる」

執事は確信を突かれ、言葉を詰まらせた。

この執事がきてから様々なことが起こっている。

気付かない方がおかしいだろう。

おそらく父も母も祖父も、判つていながら自分と同じ道を辿つたに違いない。

そう確証付けたのは、自分は家族の遺体など見ていないからだ。きっと死んだフリをしただけで、大方何処ぞで生き続けているはずだ。

自分と同じように、禁呪を使って…。

「ならば、貴様も親と同じように殺すまでだ!」

執事は壁に飾りとして掛け置いていた剣を手に取つた。

鞘から抜き、手入れの施された輝く刃をルウアに向けて眼前に構える。

しかしそれを見たルウアは微動だにせず、ただ薄く笑つた。

「ほう、父上達はそれで殺したのか。本当にこの程度の物で死んだ

か？」

取りようこよつては安い挑発染みた言葉だ。

そんなもので死ぬはずがない。

そういう絶対的な確信の基に、ルウアは言い放った。

執事はそれを受け、やはり挑発と取つて頭に血を昇らせた。

「うあああああー！！！」

凄まじい殺氣と怒声を放ち、剣を斜めに斬り下ろした。

左の肩口から右脇腹に架けて赤い線が走る。

次いで真っ赤な鮮血が辺りに散りばめ、床に模様が出来た。

執事はこれで終わつたと笑みを浮かべた。

しかし、本来床に倒れ伏すはずの身体は、立つたまま一寸も動かない。

不信に思い、伺い見るようこよつと顔を上げた。

「…ひつー！」

「……もう一度問つぞ。」この程度で死んだか？

声の主はルウアだった。

まだ死んではおらず、蔑んだ目で冷笑して執事を見下ろしていた。
だが確かに身体は斬られ、血は刻々と流れ出続けている。

それでも顔はこれから死に逝く者とは思えないほど生き生きとしていた。

ルウアは自分の手に付いた血を舐めつつ、執事に向かつて一步踏み出した。

「少なくとも俺はこの程度では死なん。父上達はどうであったか知

らんがな

一步一歩と歩み寄る。

それと同時に執事は一歩一歩と下がつていぐ。
その目は恐怖心と驚きに満ちていた。

この顔が見たかった。

こんな自分を見て、恐れ慄く様を。

だがまだ何か足りない。

満足できない…。

まだ長くこの屋敷に閉じ込められていた自分の心が満たされた感がない。

剣が引き摺られ、床と擦れあう金属音だけが部屋に木魂する。
その押し引きにルゥアは歩みを止め、嘲笑った。

そうだ。もつと楽しまなきや…。

「…どうした。俺を殺すのではなかつたのか？」

くすくすと不気味な笑い声が響き渡る。

自分の命を遊び道具とし、今の事態を楽しむ笑い声が。

そんな狂つた笑い声の元主に、執事の恐れはピークに達し、叫び声を上げた。

「う…うあああああ…！」

剣を振り上げ、また笑い続けるルゥアの身体を傷付けた。

斬られた身体は、その反動で仰け反る。

だが目の前の男の笑い声は消えない。

それを見咎めて、執事は怒声を張り上げながら、幾度も剣を振り下ろした。

鮮血が空を勢い良く舞い続ける。

肉を斬る音。

空を斬る音。

骨を斬る音。

碎かれる音。

様々な嫌に鈍い音が静かな空間を占める。

脂のついた剣は当然すぐに斬れなくなり、刺したり叩いたりの攻撃に変わっていた。

時に“死ね”“お前さえいなければ”などの怒声が混じる。絨毯やカーテンなど、部屋にあるもの全てが真赤に染まってゆく。床は血によつて大きな水溜りが出来ていた。

時期、ルウアの身体は傾き、床に倒れ伏した。

白かつた絨毯は真つ赤になり、やがて血の流れは止まつた。

それはルウアの死を意味した。

執事は剣を床に突きたて、深い息を零した。

心臓が早鐘を打ち、荒い息は治まらない。

顔についた返り血を、自らの服の袖で拭い取る。

少しの間警戒していたが、目の前の男が起き上がる事はもうなかつた。

それを確認して、執事は漸く口に笑いを零した。

今度こそ本当に心の底からの笑みを…。

「何が死ないだ。くくっ…、これで財産は私のものだ！！」

勝利を掴み取ったと言わんばかりの笑い声が屋敷中に響き渡る。それを聞きつけてやつてくる者は誰もいない。

執事自身が、今日で皆解雇にしていたのだから。
その醜く下品な笑い声は誰に聞かれることなく、長く続いた。

FILE 4：永久の戦い

執事は取り敢えず自分の有り金全てを持って、外へと出た。屋敷にあるものも持つて行きたいが、その全てを持ち出すのことは現状では不可能だ。

此処には宝石の類はまだしも、花瓶や棚など高価な骨董品が多くある。

「まあ、それはまたいざれで構わない」

そのうちこの屋敷も売り捌くのだ。

時間は幾らでもある。

死体の片付けもあることだし、屋敷の物品回収はその時でいい。

重厚な門扉を閉じ、屋敷に向かって薄笑いを浮かべると鼻で嗤つた。

「金さえあれば、此処にも用はない」

此処に勤め始めて十数年。

初めから金が目的で勤務していたが、漸くその願いが叶った。人に避けられるこの屋敷でも、勤めてみれば何てことはない。変わっているのは容姿と些細な能力だけで、決して無茶な事は言わなかつた。

今日殺した最後の末裔以外は 。

だがその狂つた子孫も死に、自分を妨げる者はもういない。執事は踵を返して、たつた一本の街へと続く道を歩き出した。もう振り返ることはしない。

全てが自分の思う通りに運んだと思い込んでいるから…。

執事が遠く離れ、姿が屋敷から見えなくなつた頃。
それを見計らつたかのようすに屋敷の空氣は一変した。
屋敷には一人の笑い声が木魂していた。
それは静かなもので、しかし何の音もしない此処では十分な大きさだ。

笑い声は邸主である人物の部屋から洩れ出していた。
中にあるのは血で染まつた凄惨な空間と、血塗れの一人の男の死体。
しかし、その死体は小刻みに震えていた。
笑いに呼応するように。

声の主は、赤い水溜りから身体を起こし、壁に体重を掛けて座り込んだ。

その間もくすくすと笑い続ける。

己の血で張り付く髪を搔き揚げると、狂氣的な赤い相貌が覗いた。
その黒髪の男は、紛れもなく死したはずのルウアだった。
彼は彼方此方に斬り傷が残されているのを自分で眺め見て嘲嗤つた。

「随分と派手にやつてくれたものだな…」

相当、恐怖心が高まり、鬱憤も溜まつていたらしい。
身体のいたる所が深く斬られており、臓器や骨が外へと飛び出して
いる。

ルウアはそれらを適当に体内へまた押し込むと、傷跡をなぞつた。
すると傷跡は残っているものの皮膚が繋がり、中は見えなくなつた。
それを見てルウアは薄く笑つた。

「折角教えてやつたものを…。本当に爪の甘い男だ」

どうして生きているのか。

執事が戻つてくれば、お決まりの様に血相を変えてまたそう言つだ
るつ。

その答えはこうである。

“先ほど唱えたフェネリット家の禁呪がこれを可能にした”
それは不死の身体にし、所謂ゾンビとなる呪い。

陽さえ浴びなければ、永久の命だ。

故にこれからは斬られただけでは死ぬ事はない。

ルウアは数十箇所に渡る傷に指を走らせていった。

全てを癒し、先程までとは正反対の漆黒の衣服を纏う。

それでも見える傷跡には、包帯を巻きつけて隠した。

窓辺に移動すると、執事が去つたであろう方角をみて笑みを浮かべ
た。

「ああ……、第一ラウンドを始めよつか……」

いつかお前は此処を売る為に帰つてくる。

その時に生きている俺を見て、お前がどんな顔をするか…。

それが俺の生涯の楽しみであり、醍醐味だ。

その為だけに俺は生き続け、此処でお前を待とう。

ルウアは冷酷で狂氣じみた声で、自身が飽きるまで笑い続けた。

精々これからも楽しませてもらおうか

もつと…、もつと…

俺が満足するまで

俺の遊戯に最後まで付き合つて貰おう

この『屍の住む館』とこいつ舞台で

END

FILE 4・永久の戦い（後書き）

妙な感じですが、限界なので「屍の館」はこれにて最終話と致します；

彼等の今後は皆様のご想像にお任せします。

ただ突発的に続きを書くかもしませんが…。

今度はルウアも出でますが、別のキャラの物語を天界させる予定です。

これを「幻獣の館シリーズ」とします。

此処まで狂気的な話を読んで下さった方々、有難う御座いました！

点数だけでもつけて頂ければ幸いです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3369f/>

幻獣の館～屍の館～

2010年10月9日04時38分発行